



ア  
メ  
リ  
カ  
童  
話  
か  
ら

10

松 原 至 大

トムソンとピーターソン

この月は、キリストさまの復活祭イイカイのある月ですから、それに関係のあるお話を致しましょう。

お家の玄関のそばにある草のもりあがりの上に、腰をおろしていたピーターソンが、ピンクのお耳を二つともばさりと倒して、同じ色のお鼻をびくびく動かしました。ピーターソンは、雄の子鬼でした。すいぶん長い名ですねでもピーター・ラビットの息子でしたから、そう言うのでした。

昨日は、ピーターソンのお誕生日でした。それであんまり楽しかったものですから、今日がとてもつまらなく思えました。ピンクやグリーンや黄色やのお砂糖あまの衣えきをかけたお誕生日のきれいなケーキも、すっかり無くなつていました。ピーターソンは、ため息をしました。その一かけらでも、残っていたらと思つたのです。

そのうちに、トムソンがなにか面白いことを知っているかも知れないと思いました。トムソンというのは、ピーターソンのいとこで、トム・ラビットおじさんのせがれせがれでした。そこでピーターソンは、急いで森の近くの赤い大きな納屋のそばの、トムソンのお家へとんで行きました。

こつこつこつと、ピーターソンは一生懸命にドアをたたきました。しばらくすると、眠そうなトムソンが出てきました。こんなに早く起きることはなかつたからです。

「ぼく、なにもすることがなくて、つまらないのさ。」と、いきなりピーターソンが鼻をならしました。「へえ、ふん。どうしてお誕生日のプレゼントで遊ばないのかい？」と、トムソンが答えました。

「まあぼく気がつかなかった。それがいい。」と、うれしそうにピーターソンは、大きな声を出しました。

びよんびよんびよん、二匹はピーターソンのお家へとんで行つて、トムソンはお誕生日のプレゼントの一つ、新しい絵具箱にとびつきました。

「筆が一本しかないからかわり番に本に彩色をしようよ。」と、トムソンが言いました。

「ぼくは、足の裏で塗れるんだぜ。」と、ピーターソンはお鼻を上に向けて言いました。「君が本に彩色している間に、ぼくは、車に塗るよ。」

長い間、二匹は忙しそうに働きました。そして車も塗り終わりました。本の中の絵も、彩色を終りました。

「次ぎは、なにを塗ろうかなと？」と、ピーターソンが言いました。

トムソンは、ひげを動かして考えこみました。やがて元気に言いました。

「いいことがあるよ。納屋のそばの鶏君のお家へ行つて、巢の中にある卵に、みんな彩色しようよ。あれはみんな真白だから、彩色したらきつときれいになるよ。」

そこでピーターソンは、絵具と、水のはいつたびんを、その車にのせて、二匹は出かけました。まだ朝が早すぎたので、卵はあまり集まつておりません。二匹は、がつかりしました。

「でもいいよ。これだけに彩色しよう。きれいになるよ。」と、ピーターソンが言いました。

絵具箱を開いて、あるだけの卵に、二匹は色を塗りました。今度はピーターソンが筆を使つて、トムソンは足を使いました。いくつかは青に、いくつかは黄に、いくつかは赤に、グリーンに、紫に。その中のあるものには、点と輪もつけました。

二匹は一生懸命に働いていたので、鶏のお家のドアが開いたのを知りませんでした。そして「あの隅のオールド・ビデューの巢の中を見ましようよ。」と、小さな女の子の音がするまで、だれか近づいてきたのを知りませんでした。「おやつ。」と、子兎たちはびつくりしました。大急ぎで車を、わらの積んである下に押しこんで、別のわらの下にもぐりました。二匹はひげさえ動かさないように気をつけて、ひっそりとして、二人の女の子の方をのぞいていました。

「私たち、今日はたくさん卵をとらなければいけないわ。復活祭ですもの。」と、一人が言いました。

「私たち、彩色した卵がとれるようだったら、いいねえ。今年は儉約するので、彩色した卵はないんですつて、お母さんがおつしやつてたわ。」と、もう一人の女の子が、ため息をつきました。

ちようど、この時、最初に言つた女の子が、小さな叫び声をあげました。

「御覧なさい、ベティーちゃん。鶏がイースター・エッグをおいといてくれたわ。」

びつくりして、二人の少女は、巢の中に輝いている卵を見つめました。やがて後の少女が言いました。

「私、鶏がそれをおいといたとは思えないわ。イースター兎じゃないかしら。」

「お母さんにお見せしましょうよ。」

二人の女の子は、その宝ものを大切に小さなエプロンに包んで、かけて行きました。

「ねえ、お誕生日のパーティーのようじゃないかい。」と、枯草の下からはい出しながら、トムソンが言いました。

「ほんとだ。」と、ピーターソンが答えました。

二匹は、人間の女の子たちを幸福にしたのかと思うとうれしくて、手をとつて巢のまわりをまわりながら、面白い復活祭の踊りをおどりました。

(ドリス・ベートマン女史の作による)